
池田を巡る恋愛。

海田 陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

池田を巡る恋愛。

【Zマーク】

Z7296C

【作者名】

海田 陽介

【あらすじ】

就職採用試験に落ち、おまけに彼女にまで振られてしまった彼女は途中まで続けていた就職試験の勉強を中断して借りていたビデオを返しにレンタルショップに行く。そこで池田は思いがけず、高校の頃、密かに憧れていた藤崎さんと再会して…。

偶然の再会

不幸にも、公務員採用試験の不採用通知が届いたのと、彼女に振られてしまったのは同じ日だった。だから、池田はどうしようもなく落ち込んでしまった。あー、と叫びだしたくなるくらいだった。試験に落ちてしまったのも仕方がない。彼女に振られてしまったのもまあ仕方がない。でもよりもよって、ふたついっぺんに起こらなくたつていいじゃないか、と池田は思った。

自棄になつて、「なんでやねん」と叫びながら携帯を床に叩きつけると、携帯は壊れはしなかつたものの、その画面にビビが入つてしまつた。それを見て、池田は猛烈に後悔した。そしてもう一度、「なんでやねん」と、田頭に涙を滲ませながら呟いた。

悪いことというものは重なるものらしい、と池田は苦渋の気持ちで学び取つた。気分転換に音楽でも聞こうと思つて、最近出たばかりのB'zのアルバムを「ミーハンポ」でかけてみた。でも、それを聞いていつもちつともよくない感じでころか、ただうるさいだけだった。池田はうんざりした気分で、そのかけていた音楽を止めた。

さすがにさつきの携帯の件で学習していたから、自棄になつて「ミーハンポ」を叩いたりするようなことはなかつたけれど、しかし、ムシャクシャした気分はどうしようもなかつた。それで何か当たれるものはないだろうかあたりを見回していたところ、池田の視線はさつきまで整理していたアルバムの写真の上に止まつた。

そこにはついているのは、高校の頃からずっとつき合ひのある友達の顔だつた。それは以前、みんなで集まって飲んだときに撮つたものだつた。眼鏡をかけて楽しそうに笑つているその友達の顔を見て

いると、池田は意味もなくムシャクシャしてきた。それで池田は写真のなかの男に向かつて、「泉谷のアホ」と、言つてみた。すると男は一瞬、写真のなかで不服そうにその表情を歪めたような気がしたけれど、もちろんそれは気のせいだった。

俺は一体何をやつているんだ、と池田は思った。我ながら自分のやつていることがアホらしくなってきた。ほんとうはこれから次の公務員試験に向けて勉強するつもりだったのだけれど、こんな気持ちではとても勉強なんて手につきそうにもなかつた。池田は諦めてちょっと外に出ることにした。この前借りていたビデオを返しにいかなければならぬ用事もあつたし、ちょうど良い機会だと判断した。

家を出ると、あたりはもうすっかり暗くなつてしまつていた。池田は試験勉強をしていたので、このところずっと朝夜が逆転した生活を送っていた。だいたい夕方五時頃に目覚めて、それから次の日の十一時頃まで活動するといった生活サイクルだった。

愛車のラブフォードに乗り込み、走り出す。この車は、学生の頃に苦労して手に入れたものだつた。まだいくらかローンが残つていたけれど、もうすぐでそのローンも終わるはずだつた。

池田は実家住まいだから、フリーターの身であつても、家賃や駐車場代のことを気にする必要がなかつた。まあ、大学を卒業しているにもかかわらず、実家のお世話になつてゐるというのもあまり居心地の良いものではなかつたけれど、しかし、公務員になると、いう目標のために取り敢えず仕方がなかつた。

池田は大学を卒業してから、アルバイトをしながら公務員を目指すという生活を送っていた。普通に社会人をやりながら公務員を目指すという手もなくなつたけれど、しかしそうするとなると相当涙ぐましい努力をしなければならなかつたし、だいたいそんなことをやつていたら公務員になれるかわかつたものではなかつた。

これは池田が実際に勉強しはじめてわかつたことなのだけれど、公務員試験というのはかなり難易度が高く、よっぽど身を入れて勉強しない限り、その試験を突破することなんてまずできないものなのだ。だから、池田は比較的に自由な身でいられるフリーターをやりながら、公務員試験の勉強を続けていた。

実際のところ、池田はもう既にいくつか結果を出していた。それでもまだ勉強を続けているのは、他に本命があるからだつた。最も、その本命のうちのひとつが、今日無惨な結果に終わってしまったわけなのだけれど。

車のなかではドラゴンアッシュのアルバムを聴いた。彼等の歌は常にポジティブなエネルギーに満ち溢れていて、池田は聴いていて元気が湧いてくるような気がした。今日みたいに口クでもないことが立て続けに一回も起つた日には、彼等の音楽に耳を澄ませて、そのポジティブなエネルギーを少しでも自分の気持ちのなかに補給したい気がした。

池田はしばらく音楽に耳を傾けていてから、ふとあることを思い出した。この音楽を作っている人間と自分は同じ年なのだ。彼等がこうやって日本のミュージックシーンに燐然と輝いている一方で、今の自分はいかがなものだろう、と池田は思った。：一年半つき合

つていた恋人に振られ、おまけに第一志望だった就職先まで落としてしまった。人間は生まれながらして不公平にできていると誰かが言っていたような気がしたけれど、まさにその通りだよな、と池田は感じた。

ああ、これから俺の将来はどうなっていくのだろう、と池田は一瞬暗澹たる思いに駆られた。でも、慌てて首を振り、いや、まだまだこれからやねん、と自分に言い聞かせた。第一もう既にいくつか内定はもらっているのだ。そんなに将来を悲観する必要はないだろう。

それにまだ俺は24なのだ。その気になりさえすれば努力次第で何だってできる。まだまだいくらでもやり直しあきく歳じやないか。そうだ、俺は絶対やつたんねん、やつたんねん、やつたんねーん、と、池田は心のなかで取り憑かれたように繰り返した。

借りていたビデオは、北野武の「ドールズ」という映画だった。その映画は池田にとって久しぶりのヒットだった。見てるだけでも涙が溢れてきそうになるその色彩の美しさや、作品全体に流れる悲哀感が、池田のなかでたまらなくフェイバリットだった。ぐっとくるね、と池田は思った。

借りていたビデオを返してしまつと、池田は取り敢えずという感じで店内をぶらついた。せっかくここまで来たのに、そのままとんぼ返りしてしまうというのも何だかもつたいないような気がした。しばらく店内に置かれている様々なビデオを見て回つたけれど、あ

まり池田の感心を惹くが、ピートオは見当たらなかつた。

「帰ろかな、と思つたところ、池田の視線はふとアダルトビデオの「コーナー」に止まつた。そういうえばここ最近はアダルトビデオなんて全然見ていないような気がした。久しぶりに借りてみるのも悪くないよな、と池田は思つた。

何しろ就職試験に失敗して、彼女にまで振られてしまつたのだ。アダルトビデオを一本ぐらい借りたからといって、べつにバチは当たらぬだらうと思つた。といつも、それくらいのことが許しもらえないようじや、世の中あまりにも救いがないじやないか、と池田は弁解するよひに思つた。

アダルトビデオの「コーナー」に入つて行こうとしたところ、背中から、「池田くん？」と、呼び止められた。

ふと振り返つてみると、そこには藤崎さんが立つていた。池田はかなり驚いてしまつた。

彼女は、池田がまだ高校生だった頃に、密かに憧れていたひとだつた。彼女に告白しようかどうしようか思い悩んだあげく、結局告白できなかつたことを、池田は彼女の顔を見つめながらぼんやりと思い出していた。心のなかにそのときの感情が鮮やかに蘇つて、池田はあれからもう何年も経つていても、ドキドキしてしまつた。

「やつぱり池田くんや」と、藤崎さんはこくらか頬を輝かせて言った。「久しぶりやな」と、彼女は続けて言つた。「おお、久しぶりやな」と、池田は答えたけれど、その声は緊張のせいか、ちょっとぎこちない感じに震えてしまつた。

「池田くんに会うのは同窓会のとき以来よな？」と、藤崎さんは言った。池田は少し考える振りをしてから、「やひこやっぱそりやな」と、答えた。

池田は、実は最後に藤崎さんに会つたときのことと明確に覚えていた。大学三年のときに高校の同窓会があつて、そこで藤崎さんとは一度顔を会わせていた。

でも、そのときは他の友達に囲まれて、ろくに話すこともできなかつた。一言二言交わすだけで精一杯だつたような気がした。実はあのときから自分は藤崎さんのことがまた気になりだしていたのかもしれない、と、こま池田はそつ直感するように思つた。

…池田は他の誰かとつつき合つても、藤崎さんのこととたまに思つ出してしまつことがあつた。そんなふうに思つたりすることは、そのときつつき合つていた恋人に対して失礼じゃないかも思つたけれど、でもそれは池田本人の意思ではじつはないともできないことだつた。

藤崎さんはそんな池田の思いを知つてか知らずか、ふつと視線を斜め上に上げると、可笑しそうにそのままを綻ばせた。

「もしかして池田くん、あれ？ ハロビ君つけてたのやつたん？」

そう訊かれると、池田としてはもう笑うことしかできなかつた。池田は開き直つて、「やひこで」と、答えた。

「ほんまによかつたん?」と、藤崎さんは車の助手席に乗り込みながら言った。

「べつにわたしに氣使わへんくてもいいんやで。わたし、男のひとがそういうの借りるのって全然気にならへんし…」

「いや、べつにな」と、池田は車のエンジンをかけながら言った。
「俺もそんなにHロビテが借りたかつたわけじやないからな」

池田は藤崎さんの手前もあって、結局ビテオを借りるのは止めることにした。

「そんな無理せんでもいいで」と、藤崎さんは笑いながらからかうように言った。つられるようにして池田も笑いながら、「いや、ほんまやで」と、答えた。「ただビテオを返しにきたついでにちょっと見ていいかなって思つてただけやねん」

「ほんまに?」と、言って藤崎さんはまた笑つた。

「ほんま、ほんま」と、答えるながら池田は車を走らせた。

立ち話というのもなんだし、これから」」飯でも食べに行こうという話になつた。といつても、この近辺には」」飯を食べるよつなところなんてなかつたから、じゃあとこう話になつて、池田の車で出掛けることになつた。

レンタルビデオ店まで、彼女は自宅から自転車で来ていた。

「でも、大丈夫なん?」と、池田は車を心地よいスピードで飛ばしながら訊いた。

もう夜の十時を過ぎていいせいか、車道に車の姿は少なかつた。
街灯の光がオレンジ色に街を染めていた。

「何が?」と、藤崎さんは池田の方を振り向いて尋ね返した。池田

は、「いや…」と、口もつてから、「明日、仕事とか大丈夫なんかなつて思つてな。… もう結構遅い時間やし」と、言葉を続けた。

すると、藤崎さんは、「それやつたら大丈夫やで」と、答えた。

「わたし、明日、久しぶりの休みやねん」

でも、そう答えた彼女の声は、心なしか寂しげに感じられた。池田は少し疑問に思つたけれど、でも結局何も訊かなかつた。代わりに、「何の仕事してんの?」と、尋ねてみた。すると、彼女は今シヨップの店員をしているのだと答えた。

彼女は大学四年のとき「みんなと同じように就職活動した。」 彼女が目指したのは、マスコミ関係の仕事だつた。昔からそういう仕事に憧れていたのだ、と彼女は語つた。でも、結局そこには受からず、半ば妥協するような形で、今の服飾関係の会社に就職した。まあ、接客は嫌いじやなかつたし、服飾の仕事にもある程度興味はあつたから、といいわけするように彼女は言つた。

「どうなん? 仕事は楽しいん?」と、池田が試しに訊いてみると、彼女は窓の外に視線を向けて、「どうなんやろ」と、少し弱い声で答えた。「楽しいときもあるんやけどな…」と、彼女は迷うように答えてから、「でも、上司とかうるさいしな、売り上げのこととか気にせなあかんかつたりでな… 何か色々大変やねん」と、疲れを帯びたような声で続けた。

「… そんなんや」と、池田は頷いた。何と言つたらいいのかわからなかつた。池田の回りの友達も大学卒業と同時に働いていたけれど、みんなそれなり大変そうにしていた。みんなの話を総合すると、池田の就職に対するイメージはあまりパツとしなかつた。

「池田くんは今何してんの?」と、藤崎さんが改まつた調子で尋ね

てきた。池田は少し迷つてから、「今、フリーターしてんねん」と、答えた。それから池田は自分の事情を彼女に話して聴かせた。

自分も大学四年のとき就職活動したのだが、結局行きたいところに行けず、途中で公務員を目指すことに変更したということ。そしてそれから一年半勉強して、今いくつか内定をもらっているということ。これからまだいくつか本命の試験が残っているということ。今田その本命うちのひとつがダメになってしまったということも、べつに話す必要はなかつたのだけれど、つい勢いで話してしまつた。

池田の話を聞き終わつたあとで、藤崎さんは、「そつか。公務員かー」と、納得したように頷いた。「確かに、公務員やつたらある程度好きなように時間が使えるもんな。…公務員のひともそれなりに大変やううけど、でも、一応定時で帰れるし、ちゃんと土日休みもらえるし」

池田はその言葉に頷いてから、「俺は趣味に生きることにしてん」と、冗談交じりに答えた。すると、藤崎さんは可笑しそうに少し口元を綻ばせた。それから、彼女はふつと表情を消すと、「わたしも公務員になれば良かつたんかな」と、ちよつと寂しそうな声で言った。

信号が赤に変わつて、池田はブレーキを踏み込んだ。オレンジ色の光に照らされた街は、妙にひつそりとして感じられた。

藤崎さんが話した」とそれから

車を三十分程走らせたあとで、結局、環状線沿いにあった「ガスト」というファミリーレストランに入った。池田としてはもつとオシャレな感じの店にしたかったのだけれど、何だか途中で探すのが面倒になってしまったのだ。

席に着くと、ふたりは取り敢えずという感じで、トリングバーをオーダーした。それから池田はハンバーグとライスのセットを注文し、藤崎さんはしばらく迷つてからパスタを注文した。

店内には平日の夜遅い時間帯といふこともあってか、人影は少なかつた。男女が入り混じった学生ふうの集団がちらほらいるくらいだった。

しばらくすると、注文した料理が運ばれてきた。料理はべつに不味くはなかったけれど、かといって美味しいわけでもなかつた。

店に入つてから、藤崎さんは色々なことを話した。高校の頃の思い出話や、そのときの共通の友達が今何をしているかということや、大学時代がどうだったということや、最近見た映画のことまで、とにかく思いつくままに色々なことを話した。藤崎さんと話すのは楽しかつた。何しろ久しぶりだし、話題が尽きることはなかつた。そして当然のように、話題は恋愛の話へと移つていつた。

池田は、実は今日、自分は振られてしまつたばかりなのだということを、彼女に話して聞かせた。厳密に言えば、池田が彼女に振られてしまつたのは今日ではなかつた。この前のデートの帰りだつた。でも、そのとき池田は彼女に対してもう一度考え方直してみてくれな

いかと言つた。あつさりと別れを受け入れるほど、池田の彼女に対する気持ちは簡単ではなかつた。

池田の言葉に対し、彼女はわかつたと答えた。そしてそれから一週間が経つた今日、彼女から電話がかかつてき、やつぱり別れたいと告げられたのだった。理由を尋ねてみたけれど、べつに理由と呼べるほどのものはないみたいだった。ただ彼女のなかで、気持ちが冷めてしまつたということらしかつた。池田はもうそれ以上彼女を引き止めようとは思わなかつた。一度引き止めダメだつたのだから仕方がない、と思った。それに無理に引き止めたりしても、自分が惨めになるだけだと判断した。

池田がそう言つと、藤崎さんは感心した様子で頷いた。

「池田くんは偉いなあ。潔いいと思つわ。…わたしゃつたら、たぶん、未練たらたらやで。きっと」

「冗談めかしてそう言つた彼女の声は、でも、どこか哀しそうだつた。

その言葉から何かを感じ取つた池田は、「もしかして、藤崎さんもわかれたばっかりとかなん?」と、試しにからかうような感じで尋ねてみた。

すると、水面に一滴の滴を零したときのように、彼女の顔の表面に哀しみがさあつと広がつていいくのがわかつた。彼女はテーブルの上の飲み差しのourkeを手にとつてそれを少し口に含むと、口元の隅でちょっとだけ泣きちない感じに微笑んだ。そして、

「…そうやねん。実はな、わたしも別れたばっかりやねん」と、哀しみを誤魔化そうとしてか、明るい声で答えた。

「…わたしな、浮氣されとつてん。…それが原因で別れたんやけどな、最近なつて別れるまで、そのことに全然気がつかへんかつてん。

それも一年近く浮氣されとつたらしくてな…もう笑うやうに…

池田はまどり答えたらしいのかわからなかつたから、黙つていた。

藤崎さんは視線をテーブルの上に落とすと、話すべき言葉を見失つてしまつたように黙りこんでしまつた。池田は何か言おうと思つたけれど、でも適当な言葉が思い浮かばなかつた。しばらくの沈黙のあとで、また藤崎さんが口を開いた。

「しかも、その浮氣相手つていうのがな、わたしの親友やつたりすんねんで。…それ知つたときは、自分のアホさ加減に何も言われへんかったわ」

そう言つて、藤崎さんは少し無理に笑つた。「…自分のすうじい身近なひとと浮氣してんのに、それに気がつかへんなんて、わたし終わつてるよな」

池田はまどりアクションしていいのかわからなかつた。少し迷つてから、「でもそれつてちょっとひどいよな」と、慎重に言葉を選びながら言つた。

「…なんで藤崎さんの彼氏はそんなことしてんやろ。…浮氣することでも、何も藤崎さんの友達とすることないのにな」

池田の言葉に、藤崎さんは何かを諦めたような、ちょっと寂しそうな微笑を浮かべた。それから、彼女はとなりの窓の向こうに視線を向けると、そのまましばらくの間黙つていた。池田は彼女の視線を巡るよう、窓の外に視線を向けた。

暗闇のなかで、信号が青から赤に変わらうとしていた。通り鉄んだ向かい側にはマクドナルドがあつて、その看板がライトアップされているのが見えた。目の前の道路を長距離トラックがすごいスピードで走りすぎていった。

「…わたしな、ずっとそのひとと結婚するつもりでおつてん。…今思つてバカみたいやねんけどな、そのひととは結構長い付き合ひやつたしな…だから…そんなひどい裏切られ方されてんのに、まだ忘れられへんかったりすんねん…ホンマ、アホらしくんやけどな」

藤崎さんは窓の外に視線を向けたまま、そつぽんやりとした口調で言つた。少し弱い声だった。池田は何と言つてあげたらいいのかわからなかつた。

「…でもまたいじ」とあるで」と、池田は氣休めにもならないとわかりながらもそう言つてみた。池田としてはできるだけ彼女を励ましてあげたかった。

藤崎さんは池田の方にちらりと視線を向けると、「さうやね」と、いぐりか哀しみ引きずつながらも小さく微笑した。

店を出たときには、時刻はもう午前三時を少し回っていた。結構長居してしまつたな、と池田は思つた。

帰りの車のなか、あまり会話は弾まなかつた。お互ひに、それぞれの思考のなかに沈み込んでしまつてゐる感じだつた。

藤崎さんが口を開いたのは、あともう少しでやつせのピートオ店に着くといつ頃になつてからだつた。

「さつきばじめんな」と、藤崎さんは謝つた。何のことなのかよくわからなくて、池田は横目でちらりと彼女の方に視線を向けた。

すると、彼女は、「…久しぶりに会ったのに、ちょっと重かったよな。あんな話するつもりじゃなかつてん」と、言い訳するよつこ言つた。

池田は咄嗟に言葉が出てこなかつたけれど、「べつにそんなことないで」と、できるだけ優しい口調で言つた。「俺も彼女に振られた話ししたんやじ」

池田がそう言つと、藤崎さんは何が可笑しかつたのか、少しこそく笑つた。そして、「お互に色々上手くいかへんよな」と、弱い声で言つた。「仕事の」ととか色々…」池田はちよつと考へてから、「確かにな」と、頷いた。

「…わたしな、いつもはやうでもないんやけどな、ときどき落とし穴に落ちたみたいに寂しくなつてしまつことがあるねん。それはべつに彼氏と別れたからとかじやなくてな、もつと漠然とした、対象のない寂しさやねん。それですごく落ち込んでしまつたりする」

信号待ちで止まつたときに彼女の方に視線を向けてみると、彼女は車の窓に頭をもたせかけて、哀しそうな顔をして外の景色を眺めていた。

「でも、それは誰でも同じや」と、池田は言つた。

すると、藤崎さんは意外な言葉を耳にしたよつこ、振り向いて池田の顔に表情のない視線を彷徨わせた。信号が青に変わつたので、池田はアクセルを踏んだ。

「俺もたまにめっちゃ寂しくなつたりすることあるで。…せっぱひとりでずっと勉強してるとな、なんかしんどくなつたりすることがあるねん。絶対結果出せるとは限らへんしな。…そういうときはすこべ寂しくなつたりするで」「ぐく

彼女は黙つて池田の顔に視線を注いでいたけれど、ふとその口元を緩めて、「池田くんもそんなこと思つたりすんねんな」と、意外だといつよりは感心した様子で頷いた。

池田はちりりと彼女の方に視線を向けて、「俺、結構寂しがり屋やつたりするしな」と、冗談めかして言つた。すると、藤崎さんは可笑しそうに口元を綻ばせた。

「でも俺はそういうときは無理に逆らわんど、流れに身を任せることにしてんねん」と、池田は正面に視線を戻しながら言葉を続けた。

「流れに身を任せる?」と、藤崎さんは繰り返した。

「…なんて言つんやろ?」どう表現したらいいのかわからなくて、池田はちよつと眉をしかめた。「落ち込んでるときつてな、ついつい落ち込んでしまつてる自分を責めてしまつやん。何こんなことで俺は落ち込んでるやろつて。でもそんなことしてもな、よけいに気持ちが沈んでしまうだけやと思つねん。だからな、そういうときは何も考えんと、落ち込んでしまえるだけ落ち込んでしまうことにじてんねん。その方が、底から浮かびあがつてくるのも早い気すんねん。…まあ、ひとにもよるんやうつんだな

藤崎さんは池田の言葉にしばらくの間黙つていたけれど、「そもそもしじへんな」と、何か考え込むような表情を浮かべて頷いた。

「とにかく」と、池田は言葉を続けた。「俺はこいつ思つことにじてんねん。何かめっちゃ嬉しいことがあったあとにはな、それと同じくらいめっちゃ嬉しいことがあるんやつて。…世の中そんな単純じゃないと思うけどな、少なくともそつ思つことによつて、気持ちがちょっと楽になんねん。ああ、こんなひどい目にあつたんやから、また次いこことはあるわつて」

そう言つてしまつてから、池田はちょっと照れくさくなつて笑つた。すると、つれられるよつとして藤崎さんもひょつと笑つた。

藤崎さんはレンタルビデオ店の前で別れた。

彼女は自転車に乗つて帰つていつた。ちょっと心配になつて送つていこうかと言つたのだけれど、彼女はひとりで帰れるから大丈夫だと答えた。

彼女の姿はすぐに夜の闇に溶けるように見えなくなつてしまつた。池田は彼女の姿が完全に見えなくなつてしまつてから、車を走らせた。

帰り際に、藤崎さんはお互ひの携帯番号とメールアドレスを交換した。

家に帰つてから、池田は彼女と話した色々なことを思い出した。そしてそれから、彼女のあの哀しそうな表情を思い出した。池田はふと思いついて、彼女のメールアドレスを画面に表示させた。何か彼女にとつて少しでも励ましとなるよつた言葉を送りたいと思った。池田はしばらく迷つてから、じつメールを送つた。

嫌なことも色々あると思つたが、まあ、元気だしてな。何もしてあげられへんけど、話し聞くことぐらいやつたらできぬと申つて、いつも電話なり、メールなりしてください。

そのメールに対しても、すぐに返事は帰つてきた。彼女はメールの

なかで、おかげでたいぶ気持ちが楽になつた、色々ありがとうございました、と書いていた。そしてそれにつけて加えるように、池田くんも早く前の彼女のことが忘れられるといいな、とも書いていた。

池田はそのメールを一度読み返してから、携帯を机の上に置いた。

池田は机の上に問題集を広げた。部屋の時計に目をやると、もう時刻は五時を回ってしまっていた。

「さてやりますか」と、池田は声に出して呟いてから、シャープペンシルを手に持った。勉強を開始する時間はいつもよりもだいぶ遅くなつてしまつていたけれど、それでも何もしないよりはマシだろうと判断した。とにかく、十一時まで気合いを入れて頑張つてみようと思つた。

ふと、窓の方に視線を向けると、閉じられたカーテンの隙間から、朝日のかわらかい光がそつと静かに差し込んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7296c/>

池田を巡る恋愛。

2010年10月21日23時56分発行